

う。ちょうど本書を読んでいる時、世界各地ではコロナ感染防止のため外出禁止令が出されていた。感染被害が深刻な欧米の一部の国々でも、犬の散歩は食料・日用品・医薬品の確保といった生活に必要な活動と同様に、一定の条件は伴うものの許可されていた。長い共生関係のなかで、これまでは、どちらかという人は自分たちの目的や状況に応じて、犬を時には「道具」「食糧」、時には「友」「パートナー」として都合よく扱ってきたが、犬が人間の愛着を勝ち取り、人間をその愛着に依存させることで、「人間こそが犬にとっての〈愛情の寄生虫〉」(p. 450)となり、徐々にこの関係性が変化してきているのではなからうかとも思う。

本書により、人間の文化・社会・生活様式の多様性と複雑さが、そのまま人と犬の関係の多様性と複雑さを照射していることが理解できた。また、身近な存在である犬と人の関係と共生について考察するとともに、「『人はいかに他者と共存できるか』を考えること」(p. 20)の機会を与えてくれた。

引用文献

- ハラウエイ, ダナ. 2013. 「伴侶種宣言—人と犬の『重要な他者性』」永野文香訳, 以文社.
_____. 2013. 「犬と人が出会うとき—異種協働のポリティクス」高橋さきの訳, 青土社.

瀬戸裕之・河野泰之編. 『東南アジア大陸部の戦争と地域住民の生存戦略—避難民・女性・少数民族・投降者からの視点』明石書店, 2020年, 328p.

渡辺彩加*

本書は、長期にわたり種々の戦争が継続した東南アジア大陸部において、犠牲者としてみられがちな地域住民を避難民、女性、少数民族、投降者に分け、戦中・戦後の社会変化に彼ら彼女らがどのような主体的な対応、すなわち、生存戦略をとってきたのかについて、公的な文書に記録されない人びとの語りを書き起こすオーラル・ヒストリーの手法をもとに考察し、戦争の勝利者からみた戦後史とは異なる被戦争社会の実相を描いた本である。ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマーの5つの国と地域を、国や地域別の編成をとらず、また、歴史学、政治学、経済学、社会学、文化人類学など多様な分野の専門家が、幅広い調査対象者にアプローチをかけた意欲的な本である。

本書は序論とおわりにを除く3部7章から構成されている。以下、本書の内容を概観する。

まず序論では、本書の本題意識を明らかにしながら、前述した東南アジア大陸部の戦争と地域住民の生存戦略といった2つのキーワードに着目すべき意義を述べている。著者らは、先行研究の課題として、本書の主題である「東南アジア大陸部の戦争」と「地域

* 京都大学大学院総合生存学館

住民の生存戦略」を見落としているのではないかと指摘している。これらをより噛み砕いて説明するならば、前者は東南アジア大陸部が断続的に長期間にわたって行なわれた戦争、複数の要素が重層的に関係した戦争、国家や国境を超えた空間的広がりをもつ戦争の3つの視点、また、後者に関しては、戦争を経験した生活者の視点、戦中・戦後の社会変化の連続性に注目する2つの視点である。これらの視点は、混迷する東南アジアのこれまでとこれからを見つめ直すために、今拾い上げるべき観点であると本書では述べられている。特に、東南アジア大陸部の戦争に関して先行研究が提示している『『自由主義陣営を守る戦争』、あるいは『民族の独立・統一を達成する戦争』という見方』(p. 26)だけではなく、戦争に巻き込まれた国や地域においていかにして地域住民が戦略的に生き延び、暮らし、関わってきたのかも含め考察すべきだと指摘している。

第1部では、北部ベトナム、東北タイを事例に「国家政策からの選択的逸脱が生存戦略となった事例」を明らかにしている。第1章で岩井美佐紀は、ベトナム戦時中の北部ベトナムに着目し、徴兵により男性が不在の中で女性たちが全面戦争に巻き込まれていく様子を記述している。女性たちは軍事支援、合作社での集団労働、子どもや高齢者といった家族のケアの役割を担っていた。十分なケアや生存保障が合作社から受けられない中で、女性たちは合作社の集団労働をサボタージュし、闇商売などで働く逸脱行動を行ない、家族へのケアを維持しようとした。逸脱行為を

行なっている女性たちを合作社は罰することではなく、見逃していた。また、女性たちは、女性ならではの気遣いと配慮で遺族へのケアを実施し、地域のネットワークや信頼関係を増加させ、地域のレジリエンスを高めることに貢献した。国家政策に対して、従うものと従わないものを主体的に選択し、家族のケアを実現するための生存戦略をとっていたことが示されている。第2章で倉島孝行は東北タイでの内戦が農民たちの半生にどのような影響や痕跡を与えたのかに注目し、元タイ国共産党の拠点の跡地の行政村に暮らす4人に対してインタビューを実施している。4人は異なる経歴、異なる政治的立場であるにもかかわらず、内戦の影響を大きく受けていた。元タイ国共産党拠点であることを逆手にとり、多額の予算や開発支援を獲得したり、元タイ国共産党を、国家の行政を補完する「森林保護自衛団」として組織することで、国軍との関係を構築したりした。

第2部では、生業転換が生存戦略となった事例をラオス中部、カンボジア・シェムリアップ市、タイ北部のケースをもとに彼ら彼女らの存在や生活史から照射している。第3章で瀬戸裕之はラオスの内戦で避難民となった人びとの主体的な生存戦略に着目している。彼らは戦時中は避難を余儀なくされていたが、戦後、移住先で土地を取得、開墾し耕作地を広げた。それがこの時期の森林の伐採と減少に大きく関係した。また、避難民が増えコミュニティが形成された集落は、ヴィエンチャン県内有数の商業地区へと発展した。海外に行った親族とのネットワークを活

用し、需要の変化を知り、織物販売からゴム生産へと生業を変化させたことから、戦争避難民が主体的に社会を変容させたのではないかと瀬戸は考察している。第4章で佐藤奈穂はカンボジアのポル・ポト時代の内戦期と戦後の地域復興について、女性に着目し考察している。内戦によって夫を亡くした女性たちが、商業分野へ進出し、互いに協力しあい、生計を維持していくための収入の確保を実現した。戦争未亡人の存在は大きな社会問題であった一方、行動範囲が拡大した女性たちが商業活動を行なうことにより、内戦後のカンボジアの復興を支えてきた側面が示された。第5章で片岡樹はタイ北部山地に着目し、冷戦期における山地の住民たちが、地域の戦乱の被害者の側面をもちながらも山茶の栽培に従事し、地域の人口構成と生業の変化に積極的に関わる存在であったことを示している。山茶がプル要因となり、さらに山茶を商品化することにより、さまざまな少数民族を呼び寄せ、地域の人口構成の変化を生んだ。これらは、例外的な事例ではなく、タイの他の山地にも見出される可能性を示唆している。

第3部では、宗教活動によって可能となった生存戦略をミャンマー北部、ベトナム南部から浮き彫りにしている。第6章で小島敬裕は現在まで戦争が継続している地域であるミャンマー・中国国境地域の山地民タアーンに着目し、国境と宗教を用いた生存戦略を明らかにした。少数民族武装集団への徴兵を逃れるために、中国へ出稼ぎに行ったり、都市部の寺院にて出家者として生活をしたりする

姿が示された。国境を超えた移動や都市への移住が避難のための手段となっており、とりわけ宗教実践が紛争地域の住民にとって重要な生存戦略として存在したことを明らかにした。第7章で大野美紀子はベトナムを事例に、宗教が戦後に果たした役割について示している。本章では1975年以降、政治的・社会的にマージナルな存在であったカトリック信徒に焦点を当てている。ベトナム南部では宗教が戦争下での生存戦略に寄与した役割は小さく、異なる宗教の信者たちの間でも戦争下で協力しながら避難していた。しかし、戦後、生存から生活へと変化を遂げていった際には、宗教によるアイデンティティーの回復が元避難民にとって戦後社会への復帰をもたらした事例を挙げている。

おわりにでは、各章の内容を総括し、序論で示した大きな問題意識と本書の意義を改めて述べるとともに、「今日の東南アジア大陸部の特質として、どのような点を指摘できるのか」(p. 299)について述べている。第一に、「戦争を契機とする分断を内包する社会」(p. 300)であり、敗者か勝者かなどの二項対立ではなく、空間的及び社会的な分断がこの地域で生じていたことを指摘している。第二に、水平的な共同関係と垂直的な協働関係の両方が生じている「戦争を契機とする協働を内包する社会」(p. 300)であると指摘している。最後に、「戦争を契機として地域住民が生み出した生業の展開と社会関係が構築されつつある」(p. 302)と言及し、被戦争社会下での新たな視点と仮説を提示し、論を閉じている。

本書の重要な意義は、今までの先行研究では焦点が当てられてこなかった人びとのオーラル・ヒストリーに着目し、その生存戦略を示している点である。被災者、被害者、加害者という分かりやすいカテゴリーに収まる人だけではなく、取り残された家族や加害者でもあり被害者でもある存在をまず明らかにし、彼ら彼女らがとった生存戦略を明らかにしている。第1章で岩井が述べているような「聞かなければ話されない話」(p. 57)のさまざまな事例が収集されている。こうした広範な事例をもとに、現代の東南アジア大陸部が「戦中・戦後に戦争避難民、女性、少数民族、投降者などの地域住民が、自らの生存戦略を模索することによって、生業や社会関係をダイナミックに変化させている地域」(p. 304)というこれまで提示されてこなかった視点をもたらし、学術的貢献は非常に大きい。

一方で、挑戦的に扱ったオーラル・ヒストリーに関して、手法上の課題は残されていると考えられる。具体的にいえば、数人のオーラル・ヒストリーだけを追って、話されていることが事実かどうかの確認をとるのは困難である。特に、ひとりに対してのみ行なう調査において、その人の都合がよいように解釈されている場合が多く存在すると考えられる。東南アジアに当てはめて考えてみれば、これまで多くの国では、現地調査に関する規制が厳しかったため、戦争に関して地域住民にインタビュー調査を行なうことは困難を極めていた。しかし、近年、部分的ではあるが、かつて戦争に何らかの形で加担していた

地域住民に対するインタビューが認められ、彼ら彼女らの体験や声、想いを記録することが可能となった。一方で、戦争を実際に体験した人びとは高齢化しており、今ここで記録を怠ってしまえば、貴重な情報が失われてしまう可能性が高い。平均寿命が比較的短い東南アジア地域においてはなおのこと、オーラル・ヒストリーを成立させるために必要な情報提供者のアカウントビリティが困難になってしまっている。今後、事実誤認を確認するとともに、照射するべき範囲を広げるためにも、ある声と別の声の隙間に埋まってしまっている人びとや時代へのさらなる調査の充実を期待したい。

ここまで本稿では、新刊本の内容と批判的な検討を行なってきた。本稿の後半で検討したように本書は課題もあるが、これらは本書の価値を決して損ねるものではない。本書は東南アジアで行なわれていたさまざまな生存戦略を挑戦的に明らかにしているのだから、ぜひ一度手にとって読んでほしい一冊である。

杉島敬志編、『コミュニケーション的存在論の人類学』臨川書店、2019年、360 p.

木村大治*

本書は、近年の人類学において注目を集める「存在論的転回」について、編者・杉島氏が提唱している「複ゲーム状況」論の視点から論じようとするものである。前著『複ゲー

* 京都大学名誉教授